

あなたには自慢の彼女がいる。  
その娘の名前は、白上フブキ。

とびっきりの美少女だが、それを鼻にかけるでもなく、社交的で明るい性格はクラスの誰からも好かれていた。そんなフブキだが意外なことに、あなたと同じオタク趣味を持っており、最初に仲良くなったきっかけはアニメシヨップで偶然出会ったことだった。

友達からは「月とスッポンみたいなカップルだ」とよくからかわれる。自分でもそう思う。

だから以前、それとなく尋ねたことがある。

なぜ、自分のような陰キャオタクを選んできたのか？

するとフブキは笑って答えた——「一緒にいて楽しいからだよ、と。」

まったく同意だ。自分もフブキとアニメやゲームについて語っていると、きき何よりも楽しい。だが、しかし——最近、そんな彼女の様子が変なのだ。妙に余所余所しいというか、他人行儀というか。

今だってそうだ。

「フブちゃん……フブちゃん？ どうしたの？」

「え？ あ、ごめんね……な、なんの話だった？」

「だから、昨日出た新作……買ったからさ、うちで一緒にやろうよ」

「そ、そうなんだ。うん、行く行く。楽しみだなあ」

微笑むフブキだが、あなたにはそれが愛想笑いに見えてしまう。

困惑していると、背後から声をかけられた。

「白上さん。ちょっといいかな？」

フブキの細い肩がびくつと震えた。

振り返ると、用務員のおじさんが立っていた。

最近になってこの学校にやって来た用務員で、名前も知らない。だが、いつもニヤニヤしながら見てくるのが気持ち悪いと女子からの評判はすこぶる悪い。また、彼が赴任してからというものの女子更衣室から下着がなくなるといふ事件が多発しており、この男が犯人じゃないかとまことしやかに囁かれていた。

そんな奴が、フブキにいったいなんの用があるというのか。

あなたは尻込みしつつもフブキを守るように立ち上がった。

「用務員さん……あの、なんですか？」

「あん？ なんだあ？ 用があるのはそっちの彼女なんだが？」

「用って、いったいどんな？」

「個人的なときさ。キミに教える義理はないねえ……なあ、白上さん？」

用務員に同意を求められたフブキは、すすすつと彼の隣に移動した。

あなたはきよんとしてしまう。

「ご、ごめんね……悪いけど、さっきの話はまた今度」

「え？ あ、フブちゃ」

「用務員さん。行きましょう」

フブキはくると背を向けて去っていった。

その背中に回された、用務員の馴れ馴れしい手が非常に不愉快だった。

その場に残されたあなたは、しばし呆然としていた。そして、何か納得のいく理由を見つけようと努力した。フブキはクラス委員でもあるし、教室の備品か何かの取り扱いについて確認することでもあったのだろう。きつとそうなのだろう。

あなたは自分にそう言い聞かせた。

## §

学校のグラウンドの端っこに、用務員が使う作業小屋がある。

掃除や営繕のための道具が置かれている他、トイレや水道、寝床なんかも備えつけられている。実質的には用務員の休憩室であり、その気になれば寝泊まりもできる環境が整っていた。

その薄汚い煎餅布団の上で、フブキは用務員の汚いちんぽにおまんこ奉仕を行っていた。

「ンほおオ♥ ほっ♥ おオン♥ おっおっおお。おッ♥」

「ぐふふ……挿れる前からぐちよぐちよに濡らしおって。ちよっと挿し込んだら全自動で飲み込まれていくじゃないか。そんなにワシのちんぽがいいのか? ん?」

「はひいいいん♥ お、おじさんのちんぽおお♥ 最高ですうううん♥」

フブキは騎乗位ファックで、彼氏のではないちんぽを夢中で求めている。



「彼氏の家に遊びに行くはずだったんだらう？ それなのに悪いねえ、ワシの性欲処理を優先させちゃって」

「いいんです♥ 彼と遊ぶより、おじさんとセックスしてる方が楽しいもん♥」

「ふひひ。まったく従順になったもんだ。最初のうちはあんなに反抗的だったのになあ？ あれはあれでよかったんだが……特に、処女を奪ってやった初レイプのとき。うーん、あれは興奮したなあ」

「もう、おじさんのへんたあい♥ 泣いて嫌がる白上を無理やり犯して、おちんぼ奴隷に変えたことをいつまで引つ張るんですか♥ もう一ヶ月も前のことですよ♥」

そう、あれは一ヶ月前のこと――

体育の時間中、忘れ物を取りに更衣室へと戻ったフブキは、彼の犯行現場にばったり出くわしたのだ。即ち、下着泥棒の現場に。しかも間の悪いことに、彼が握っていたのはフブキのパンティだった。

「よ、用務員のおじさん？ ここで何を……あ、それ！ わたしの下着!?」

「い、いや。違うんだよ。これはその……」

「最近、学校で噂になってる下着泥棒の正体は、あなただったんですね……」

「ゆ、許しておくれ！ ほんの出来心だったんだ！ もう二度としないから……な？」

「そういうわけにはいきません！ このことは先生に報告させていただきます！」

「そうか……そうか、じゃあ、ワシもいよいよお縄ってわけか。となれば、今更我慢したところで意味はないな……」

「え……な、何を言っているんですか？」

「おじさんなあ、昔から女子高生をレイプしたかったんだ……警察の厄介になる前にさ、その夢を叶えさせてくれよ。最後に、お嬢ちゃんのえっちな身体でなあ！」

「ひっ……い、いやあああつ」

逃げ出そうとしたフブキだが、恐怖から足が纏れてしまう。

そこに用務員の身体が覆い被さり、体操着を引き裂かれ、あなたのためにと大事にしていた処女を呆気なく奪われてしまった。一切の容赦なく初物まんこを犯され、当然のように中出しをされた。それも一度や二度じゃなく、数え切れないほど。

このときに写真を撮られ、フブキはもう用務員に逆らえなくなった。命じられるがままフブキは彼の性奴隷となった。

行為は、あなたの知らないところで毎日のように行われた。

そして一ヶ月も過ぎた頃には、なんでも言うことを聞く都合のいいJKオナホの誕生というわけだ。

「なあ、フブキちゃん。もういい加減、あの男とは別れたらどうだ？」

「そ、それは……♥」

「もう身も心もワシのもんだと、自分でもわかつとるだろう？」

「でも、彼、すごくいい人だし……き、傷つけたくないんです♥ 自分の彼女が、何十歳も年上のおじさんにレイプされたうえ、おちんぼ調教で従順な肉便器になったなんて知ったら……彼、大変なことになっちゃう♥」

「なるほど。まだ情が残つとるのか……生意気なっ」  
「はむうっ♥ んちゅうううううう」

おじさんはフブキを抱き寄せると、乱暴なキスで唇を塞いだ。  
お口の中をめちやくちやに舐め回され、フブキの目つきがとろんと蕩ける。

あなたは知る由もないだろうがフブキはキスハメが大好きで、上下の口を同時に責められると簡単にイってしまうのだ。そして絶頂直後の敏感まんこをガン突きし、理性を消し飛ばす——これがおじさんの常套手段だった。

「人の女を連れて、いつまでも彼氏面されるのも目障りだからなあ……」

おじさんは、フブキの耳元で何かを囁いた。

フブキは僅かな逡巡を見せた後に「はひい、わかりましたあ♥」と返事をした。

「くく、いい子だ……ぶちゅうう」

「ンフううう……んちゅう、れろおお♥」

おじさんに褒められたフブキは嬉しそうに、ねっとり舌を絡める。

この日もフブキは、日が暮れるまでおじさんとの浮気セックスに没頭し、何度も何度も何度も膣内射精を受けた。その淫らな相貌に、あなたへの想いなど一切残っていないように見えた。

## §

翌日からフブキは学校を休むようになった。  
体調不良だそうだ。

それが何日も続き、一週間が過ぎた。

一向に登校してこないフブキに対し、あなたは何度もメッセージを送った。しかし返信があったのは最初のうちだけで、ここ数日は一切既読がつかなくなった。電話もかけたが出てくれなかった。

あなたはとうとう、フブキの家を直接訪ねることにした。

フブキの家は中流の一軒家という佇まいだった。

フブキの両親は仕事で長く留守にしており、彼女は一人で暮らしているという。だからこそあなたは余計にフブキのことが心配だったのだ。

呼び鈴を鳴らす。

反応はない。

あなたはスマホを手に取り、「今、フブちゃんの家の前に来てるんだけど」とメッセージを送った。正直、期待はしていなかった——だが、久しぶりに既読マークがついたことであなたの心臓は跳ね上がった。

そして二階のベランダから声が聞こえた。

「お、おーい……こっちだよ♥」

見上げると、赤ら顔のフブキが手を振っていた。

特におかしな様子はないように見えた——あなたの視点からは。

だが、実際はこうだ。

このとき彼女は下に何も穿いておらず、その無防備なデカ尻を後ろに突き出しおじさんとナマハメをしている真っ最中だった。しかしベランダの柵は不透明で、地上からはフブキの上半身しか見えなかったのだ。

「フブちゃん！ 起きてて大丈夫なの？」

「う、うん♥ 平気だよ♥ もう、体調よくなったから……ンほっ♥」

「本当かい？ 顔色、真っ赤だよ？ まだ熱があるんじゃない？」

「だ、大丈夫、だって……ば、あああん♥ んっんん♥」



フブキはおじさんに犯されながら、必死に平静を装っている。

なんでもないような顔をしておきながらケツを丸出しにして、おじさんのデカちゃんに突かれながら彼氏に笑顔を振り撒くのは、得も言われぬ背徳感があるのだろう。フブキはもう愛液の垂れ流しが止まらなくなっている。そこで不意に膣内の男根が痙攣し、

「出すぞ……っ！」

「んごっ♥ おお……ほッ♥ おお、やっべ……か、彼氏の見てる前で種付けされるの、気持ちよすぎりゅ♥ イく♥ イっちゃいます……♥」

ペランダの柵にしがみついてなんとか堪えるフブキだが、その下半身は生まれたての子鹿みたいにくぐくぐぶるぶると震えていた。

「せっかく来たんだ……中に入ってもらえよ」

「え♥ でも♥」

「命令だぞ？ 早くしろ」

「わ、わかりました……♥」

フブキはペランダの手摺から顔だけを覗かせて、

「き、来てくれてありがとう♥ セっかくだし、上がって行って♥」

「え、いいのかい？」

「うん♥ ど、どうぞ……♥」

お言葉に甘えて、あなたはフブキの家にお邪魔した。

久しぶりにフブキとゆっくり話ができると思い、言葉にはせずとも心は踊っていた。

病気の身で、親に頼ることもできず、フブキも不安だったことだろう——あなたはそんな彼女に寄り添うべく、どんなことでもするつもりだった。たとえ彼女が遠慮したとしても、絶対に看病「い、いらっしやうい……♥」

フブキは、部屋着らしいラフな格好であなたを出迎えた。

顔を合わせた瞬間にあなたは眉を顰めた。

臭いのだ、フブキが。

とても知らん顔などできない激臭だった。

あなたはなんとか作り笑顔を浮かべて、

「あ、えっと……この一週間、どうしてたの？ 一人で大丈夫だった？ ご飯とか、その……お、お風呂とか？ ちゃんと入ってる……？」

「あ、ごめんなさい……実は、最近入れてなくて。 白上、臭いですか？」

「そ、そんなことないよ！」

あなたは嘘をついた。

本当は今すぐ家中を換気したいくらい臭っていた。

フブキだけではなく、家全体がこの醜えたニオイに満たされているようだった。

それもそのはずで、フブキはこの一週間ずうずうっとおじさんとセックスをしていたのだ。ちんぽがまんこに入っていない時間の方が短いくらいだ。今も、ノーパンの股ぐらからは先程のザーメンが零れ落ちて床の染みと

「何か飲み物用意するから、待っててくださいね」

リビングに通されたあなたは、言われた通りにソファで待った。  
そのすぐ近く——距離にしてほんの数メートル先のドアの裏で、フブキは  
おじさんのちゃんぽんにむしゃぶりついていた。エロ踞踞で足を広げ、根本まで  
ぐっほりと啜える、手慣れた様子の本気フェラだ。

「ぢゅぽぽぽぽっ♡ んじゅる♡ じゅるるるう♡」

「くっくっくっ、まずは自分の水分補給からせんとなあ……フブキちゃんの  
大好きなおじさんのちゃんぽんはミルク、頑張って搾り取るんだぞ？ あんまり遅  
いと怪しまれるからなあ」

「んもう、おじさんったら……んちゅ♡ わざわざ、彼を家の中に招いて、こ  
んなこと……バレたらどうするんですかあ♡ ちゅっぽちゅっぽちゅっぽ  
♡」



「このスリルがいいんじゃないか。今もフブキちゃんを自分の恋人だと思い込んでる勘違い男にちゅば音が聞こえる距離で、しゃぶらせる……こんな優越感あるまい？」

「はふうう……おちんぼ、ビキビキ♥ また、ぶっ濃いザーメン汁ぶち撒けるんですね♥ おじさんの、すっごく臭いから……そんなのごつくんしたお口で彼とお話なんてできません♥ んじゅぽっ♥ ぢゅぽお♥」

「今更気にしなくても、フブキちゃんの全身にはもうワシのニオイが染みついているよ。声に出して言わなかっただけで、あいつもフブキちゃんのザマにはドン引きしたことだろうさ……なんだこの女、チンカスみたいなニオイしやがって、ってな」

「チンカスだなんて酷いですう♥ おじさんのせいなのにい♥」

おじさんは絶倫かつ遅漏だ。

射精させるのには苦勞したが、なんとかあなたに怪しまれる前に終わらせることができた。もちろん出された精液はすべて飲み干したが、おじさんの言う通り今更そんなことを気にしても仕方ないほどフブキは全身から精臭を撒き散らしていた。

そしてフブキは、おじさんからことづかっていた命令をあなたに伝えた。

「あの、さ……よかったら今日、泊まっていきませんか？」

「え、ええ？ 俺が、フブちゃんちに？」

「ほら、やっぱり病気のときに一人は不安だし……ね、駄目かな？」

「そ、そんなことないよ！ フブちゃんがそうして欲しいって言うなら、俺に断る理由なんてないさ！ 掃除とか、料理とか……今日は俺に任せてよ！」

「わあ、ありがとう」

フブキはあなたの手を取ってにつこりと微笑んだ。

これが、おじさんの「ゲーム」の延長線上であることなど、わかりきっていた。フブキがこの一週間、学校を休んでいたのはおじさんの徹底的な調教を受けるためだ。あなたのことを忘れ、本当のご主人様が誰なのかをまんこに教え込まれてしまった。

その後も、あなたの目を盗んで隠姦は続いた。

廊下の物陰で、カーテンの裏で、トイレの中で――

あなたがフブキから目を離す度に、あなたの恋人はおっさんの小汚い肉棒で繰り返しハメ倒された。しかしあなたはそのことにまるで気づかない。そもそも、同じ屋根の下に間男が潜んでいるということ自体があなたにとって想像の埒外である。

そして夜――

あなたが客室のベッドで眠っていると、そのドアが静かに開かれた。

「おーおー、よく眠っておるわい」

「はひっ♥ あっ……んはっ♥」

「ぐふ、間抜け面でぐうすかと……こうまで鈍いと寝取り甲斐がないな？」

「あひんっ♥ 待って、おじさっ……ンおおオオ♥」

フブキはおじさんの腕に抱かれ、股ぐらを剛直に貫かれていた。

駅弁ファックをしながら、フブキはおじさんの胸をぽかぽか叩く。

「もお♡ おちんぽ突っ込んだまま、確認もしないで入っていくなんて……も、もし彼が起きてたら、一発でアウトでしたよお♡」  
「それはそれで面白かったが……ま、先の楽しみってことにしようか」  
「ひゃうん♡ そ、そんな♡ 彼の隣でえ♡」

おじさんはフブキをあなたの隣に寝かすと、そのまま激しく腰を振った。フブキはあなたを起こすまいと口を押さえ、ちょこさいな反抗を見せるが、無駄なことだ。巨大な肉芯に身の内を穿り返され、フブキはすぐにオホ声を上げた。

「ンおお。お。っ♡ らめえ♡ 我慢できにや……おっほオ♡」

「そうだ、もっと喘いでそいつを起こしてやれ」

「いやああアン♡ そんなのめええ♡ こ、こんな、おまんこにナマちんぽずっぽしゅっ刺さってるところ見られたら、なんて説明すればいいんですかあ♡」

「そのままだを伝えればいいじゃないか。なんならワシが代わりに言っちゃろうか——やあ、おはよう。実はこれ、この通り、ワシらはこういう関係でなあ……一ヶ月前のことだ、更衣室で女子のパンツを漁っていたら、ぼったり出くわしてのう。口封じがてら中出しレイプしてやって、言うことを聞かせるために写真も撮って、それからというもののフブキちゃんはワシのちんぽケースになったんだよ」

「ちんぽケースだなんて……ち、違っ♡ 違うのお♡」

「何が違うんだ？ 言ってみろ、おら！」

「おほっ♡ ご、ごめんなしゃ……何も違わないですうう♡」



お尻を引っ叩かれ、フブキはあっさりと前言を翻した。

口で言うほどあなたのことなど気にも留めず、デカケツをぐりぐり押しつけておじさんちんぽに媚びまくっている。あなたの寝顔をチラチラ見ながら「ごめんね♥ ごめんね♥」と頻りに呟いているが、腰の動きを止めるつもりはなさそうだ。

そして今夜、まず一発目の精液がフブキの膣に注がれた。

もちろんそれで終わるわけもなく、すぐに抜かずの二回戦が始まる。

フブキは両手両足でおじさんにしがみつき、下品なディーブキスで交わりながら、絶え間なく膣内を抉る巨根の快楽に酔いしれた。

「なあ、フブキちゃん……そろそろいいだろう？ そいつの顔を見ながら、はつきりと宣言してくれよ。わたしはもう、身も心もおじさんのものです、専用肉便器として一生お世話させていただきます……ってさ」

「そ、そんなっ……そんな、こと♥ 言えないよおお♥」

「じゃ、もうちんぽ抜いちゃおうっかなあ〜？」

「ああん♥ それもらめえ♥ おちんぽ抜いちゃやだあ♥」

「それなら言うんだよ！ おらおら！」

「おほおほおオオオオン♥ は、はひいひい♥ 言いましゅう♥」

「よしよし……そいつの顔を見ながら、はつきり言うんだぞお？」

「きやん♥」

フブキは背中を押され、あなたの身体に覆い被さるように四つん這いになった。Kカップのデカ乳があなたに押しつけられて「ぐにゅう♥」と潰れる。あなたに起きる気配はなく、呑気に眠り続けている。

フブキは後背位で犯されながら、あなたの寝顔に向かって告げた。

「ご、ごめんね♥ わたし、もう、あなたの彼女はいられないの♥ だって、こんな遅いおちんぽ様に寝取られちゃったら服従するしかないもの♥ だけど、あなただって悪いんだよ……白上が脅迫レイプされ続けた一ヶ月のあいだ、全然気づいてくれないんだもん♥ あなたが助けてくれたら、違った未来になってたかも知れないのに……♥」

フブキは目を閉じ、あなたの唇に最後の別れをしようとする。  
だが――

「駄目だ」

「ふあっ……んむうううんんっちゅ♥ ちゅ♥ ちゅう♥」

あなたの唇に触れる寸前、顎を掴まれたフブキはおじさんの方に引き寄せられた。あなたの代わりにフブキの唇を貪って、所有権を主張するみたいにしつこくディーブキスを繰り返す。

「ったく、どさくさでなにしようとしてんだ？ ワシというものがありながら、好きでもなんでもない男にキスしようとするとは……まだまだ情婦としての躰が足りんようだな！」

「ひぐうっ♥ おお、おっ♥ しゅ、しゅみまへんん♥ もう二度と、おじ

さんのためのお口を他の男の人に使おうとは思いませんから……んちゅう

♥ ちゅば♥ れろれろ♥ ん、おじさん……しゅき♥ しゅきれす♥ ち

ゅううう♥」

「ワシも愛してるぞお、フブキい……くくく」

あなたからフブキを引き剥がすと、おじさんは鬼のような勢いでピストンを繰り出す。フブキは溜まりもなくアへ顔を晒し、飛び散る愛液はあなたの寝顔にまで降り注いだ。



「あへえええええ♥ 濃ゆーいちゃんぽ汁が子宮に出てるのわかるうううん♥  
次から、次へと……どんどん、溢れてっ♥ 射精量えっぐうううう♥  
彼氏に見せつけるみたいにい、白上のおまんこを塗り潰していくよおお♥」  
「フブキ。もう彼氏じゃないだろう?」  
「ああ、そうでひたあ♥ 元・彼氏さん……ですね♥」

おじさんはフブキの尻たぶを両手で鷲掴みにしながら、心ゆくまで中出しを楽しんだ。フブキのケツ穴はひくひくと開閉を繰り返して、耳を垂れ、尻尾をパタパタ振り乱しながら全身で悦びを表現していた。

こうしてフブキは、完全におじさんの女として堕ちた。

こうなるとうとうあなたなど邪魔なだけだ。  
おじさんはフブキと繋がったまま彼女の部屋へと戻り、交尾の続きを行うのだった。

## §

フブキが学校を辞めたのは、それから間もなくのこと。  
あなたにはなんの理由も告げられず、ただ一身上の都合でのことだ。  
連絡を取ろうにも一切繋がらず、フブキの家まで行っても応対されることはなかった。

失意のうちにときは流れ、一ヶ月、二ヶ月、三ヶ月——そして半年が経った頃。未だにフブキへの未練が断ち切れず、淀んだ毎日を送るあなたのスマホに、彼女からのメッセージが届いた。

「フ、フブちゃん……っ!」

暗く落ち込んでいたあなたの双眸に光が宿ったが、それも束の間のこと。  
メッセージにはただ一言、「おめでた報告♥」と書かれていた。  
それと添付画像が一枚。

そこに映っていたのは——













